

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第6話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチエリールタ（30）：騎士団長

チビィ：魔族

シャーザベスラ：ヌノの皇女

シャーニューニダ：魔族

嵐宮芽里：夕杜王国の王女

ニユンリン：魔族

浮世心愛：五龍（ゴーゴニペ）

ソガメーナ、レオーナ、ナニダーナ

：レドニクスの手先

ジャンキサス（40）：ポストゼラン

ガロニア国王

アルノ・ヨナ：ポストゼランガロニア

王女

○タ杜王国・住宅街

シャーザベスラム「僕の言葉は伝わったみたいだ。僕が皇女だからみんな聞いてくれたのか」

ルチェリールタ（30）「チビイ！ チビイは狙われないから隠れてて！ あとで迎えに行く！」

チビイ「わかった！」

チビイ、隠れようとする。

ルチェリールタM「こいつらの姿、見たことがある……なんで。こいつらは倒されたはずじゃあ」

ソガメーナ「は！ お前までいるとはな！
ならまずはお前だ！」

ルチェリールタ「？」

ソガメーナ、レオノーナ、ナニダーナ、

魔法を放つ。

ルチェリールタ「え？」

チビイに向かう属性魔法。

ルチェリールタ「しまっ」

響き渡る爆音。

ルチェリールタ「チビイーツ！」

煙が晴れる。

芽里、雷の剣を構えている。シャーザ
ベスラ、水の鯨を召喚。

シャーザベスラ「チビイは大丈夫だ！」

ルチェリールタ「なにこれ、こいつら強すぎ

……」

2つの勢力が向かい合う。

嵐宮芽里「行きますよ！」

シャーザベスラ「チビイ！ 隠れてろ！」

シャーザベスラ、水でチビイを包んで
遠くに飛ばす。

シャーニューニダ「まじかよ……ここで死ぬ
のか？」

シャーニューニダの顔から余裕がなく
なっている。

ニュンリン「こここここれ……あの巨人の
手下？ こんな勝てっこない……」

ニユンリン、おびえている。

芽里「子夜、瑠璃、琵琶と憧憬、逮夜の雷鳴

……」

芽里、詠唱しながら剣を横に振る。

芽里「虚友達の世界 (void ihlabathi)」

空間がひび割れる。

○虚友達の世界

どこまでも続く地面。宇宙空間のような空。

ニユンリン「何これ!？」

ニユンリン、ルチェリールタにくつついておびえている。

ルチェリールタ「な、何……芽里さんの技?

魔素出力があがってる……」

芽里「はい! これからは戦闘に集中してください……行きますよ、心愛」

浮世心愛「そうじゃな……」

心愛、仮面を外す。

あらわになる、妖艶で美しい顔。

○夕杜王国・住宅街

街に出現した、黒いドーム。

男 A 「なんだあれ」

女 A 「ちよつとこっち来てみてよ」

女 B 「なにあれ！？」

民衆が、黒いドームを見ている。

チビィ「あれは誰のだ？ 遠くて見えないぞ

……」

○虚友達の世界

芽里「やつらは強いです……」

シャーザベスラ「おいおいおいおい！ 僕は

こんなところで死ぬわけにはいかないんだ

……！！」

シャーニューニダ「ちいつ……」

シャーニューニダ、舌打ち。

戦闘開始。

はげしくぶつかり合う。

ルチェリールタ「はあっ！」

拘束魔法発動。

レオナーナ「ふんっ」

レオナーナ力む。

拘束魔法破られる。

ルチェリールタ「く……増強剤がなかったら
こんなもんか」

ニユンリン「怖い……」

ルチェリールタ「危ないと思ったなら下がっ
てて。ニユンリンはわたしが守るから」

ニユンリン「……すき」

ニユンリン、ちよつと笑顔になる。

ルチェリールタ、激しい戦闘に加勢す
る。

激しい音と光が発されている。

ルチェリールタ「はあっ！」

ソガメーナ「ぬあっ！」

互いにはじかれ、2勢力が距離を取る。

ほぼ直角なため、にらみ合って膠着状
態になっている。

シャーニューニダ「ニユンリン、何をしてい

る。立て」

ニユンリン「あ、あああ……」

ニユンリン、膝ががくがく震えて立ってない。

シャーニューニダ「お前も弱くないだろう、闘え」

ニユンリン「あ……こ、怖い……」

シャーニューニダ「お前なあ。これだけの過剰戦力で互角なんだぞ。少しは役に立て……役に立たないなら邪魔だ、帰れ」

シャーニューニダ、ため息をつく。

いまだ膠着状態。

ルチェリールタ「シャーニューニダ！ 言い過ぎ！ ニユンリンはあの時、何も間違ったことをしてないからね」

ニユンリン「でも、本当に大事な人の役に立てないくらいなら……」

シャーニューニダ「お前の力はそんなものか、役に立てないのか」

シャーザベスラ「シャーニューニダ、言い過

ぎだぞ」

シャーニューニダ「はあ」

ルチェリールタM「ニュンリン……」

ルチェリールタ、心配そうにニュンリ

ンを見つめる。

ニュンリン「ルチェリールタ、ごめん……」

芽里「心愛！ 消耗を考えるとあまり使いたくはありませんが、私にとってそれは結果魔法を発動した時点で同じこと。私も全力を出しますから、あなたも力を開放しなさい！」

芽里、叫ぶ。

心愛「やれやれ、仕方ないのう」

心愛の魔素出力が増加していく。

ルチェリールタ「な、こんな魔素出力……人

間に出せるの？」

心愛「わらわは、魔族じゃ」

ルチェリールタ「え？」

心愛「はあっ！」

心愛の周りに、雷が集まっていく。

心愛の姿が変化する。

サイズが大きくなる。9本の尻尾に、
全身真っ白でとがった顔のドラゴン。

ルチェリールタ「その姿は……」

心愛「行くぞ、芽里」

芽里「はい」

心愛と芽里、力をためる。

芽里をかたどった雷の分身が現れる。

シャーザベスラ「こんなにも魔素出力が……

す、すごい……僕なんかが入っていけない

……」

芽里、刀を振る。

心愛、咆哮をあげる。

雷鳴が空間内にとどろく。

空間がひび割れる。

○夕杜王国・住宅街

黒いドームが割れる。

中からルチェリールタたちが出てくる。

人だかりが集まっている。

男B「あれ、王女様じゃね？　なんで他国の

王女様まで」

女C「なんで？」

ざわざわする民衆。

芽里「た、倒せましたね……」

心愛「ああ」

シャーザベスラ「ここにいるみんな！　敵は

倒したけどまだ危険かもしれない、一旦こ

こから離れるんだ！」

民衆、その場から離れていく。

チビィ「おい！　無事だったか！」

ルチェリールタ「チビィ！」

ルチェリールタ、チビィを抱きしめる。

○宿屋・個室

一行が全員集まって休憩している。

ルチェリールタ「心愛さん……あなたのあの

姿。五龍（ゴーゴニペ）……九尾の白面、

コリウス・ヴァリスじゃないですか？」

ニュンリン「嘘でしょ！？　どんな姿かまで

は知らなかったけど……」

チビィ「そうなのか？ 確か本で読んだことがあるぜ！」

ルチェリールタ「五神のうちの1人、雷神メアリベス・ハラミクの眷属。当然人間にもなれるから、人間社会に溶け込んでいる」

心愛「……その通りじゃ」

心愛、静かに返事。

チビィ「あれ、そいつが眷属ならさ……芽里がメアリベス・ハラミクってことか？」

ルチェリールタ、ニウンリン、シャーニューニダ「！」

ルチェリールタM「そうだ！ やけに2人親しいと思ってた……」

流れる沈黙。

芽里「残念ながら違います。神ならもっと手助けできたでしょうが、私は神ではございません。恐れ多いです、神だなんて」

芽里、複雑な表情で笑う。

心愛「そうじゃ、こいつは神ではない」

芽里「というわけです。私は地位が高く、た
またまコリウス・ヴァリス様……心愛と仲
良くできただけのこと。神に比べたら私な
んて全然弱いでしょう」

ルチェリールタ「確かにそっか……びつくり
したあゝ！」

ルチェリールタ、ベッドに転がる。

ニウンリン「ルチェリールタっ！」

ニウンリン、ルチェリールタにくつつ
く。

ニウンリン「役に立てなかったよ……シャー
ニューニダに怒られたし……」

ニウンリン、涙を浮かべる。

ルチェリールタ「大丈夫、一緒にいていいか
らね」

ルチェリールタ、ニウンリンの頭をな
でる。

ニウンリン「……えへへ」

○タ杜王国・住宅街

街に人々がたくさんいる。

芽里「では、ポストゼランガロニア法国へ向かいましょうか」

ルチェリールタ「世界の破壊者？　はほうつておいていいんですか？」

芽里「やつらはまず、私たちを殺しにくるはず。ということは、しばらく放っておいても街は大丈夫。まだ、仲間を集めたいと思います。それほど奴は……ローレ・レドニクスは強いとされていますから。闘ったことはありませんが」

芽里、真剣な表情。

芽里「あ、その前に。服屋に寄りませんか？」

芽里の表情が明るくなる。

ルチェリールタ「はい？」

ルチェリールタ、間の抜けた声を出す。

芽里「これから王の子たちを集めるのです。

あまり目立ちすぎるのもよくありません。

ですので服屋に行きましょう！　お金ならお母様からもらってきていますから！」

ルチェリールタ「あ、まあ……」

一行、服屋に向かうことに。

心愛「あやつはファッションが趣味なのじゃ。

建前があるから地味な服に思うがの」

ルチェリールタ「なるほど……」

○服屋・内装

芽里「心愛！ 来てください！ こっちにか
わいい服がありますよ！」

芽里、はしゃいでいる。心愛、芽里の
もとへ。

シャーザベスラ「さ、僕も選びますか。地味
とは言ってたけど、要するに皇女ってバレ
なきやかわいいのでもいってことだろ」

ニユンリン「ね、あーしたちも選ぼうよ！」

ルチェリールタ「あ、えっとわたしたちは別
にそこまでいらないんじゃ」

ニユンリン「選ぼう！」

ルチェリールタ「あ、うん……」

3人、服を選びに行く。

ルチェリールタとニュンリン、芽里

と心愛とシャーザベスラ、それぞれ楽しそうに服を選んでいる。

チビィ「お前は？」

シャーニューニダ「興味ない。余計な出費が増えたら旅の目的の邪魔になる。そういう意味だと心愛の服は変化なしでいいと思うんだが」

チビィ「ニュンリンは？」

シャーニューニダ「あいつか？ 知らん。強いて言うなら豊満な肉体が視線を集めるから、目立たないために地味な服がいいかもな」

チビィ「お前、仲間のことちゃんと見てるじゃないか。ぶっきらぼうだと思ってたけど、案外いいやつ」

チビィ、シャーニューニダの頭に乗る。

チビィ「あいつら、特にシャーザベスラがボクたち2人つきりなの見て放置するなんて」
シャーニューニダ「ここでお前を殺してみろ。」

報復を受ける。そんなのはごめんだ」

チビィ「そうかよ？」

しばらくして、服選びが終わる。

○港・受付

芽里「ポストゼランガロニア行きの船をお願いします」

受付の女「王女様が2人もどこへ行かれるのですか？」

シャーニューニダ「バレてるじゃないか」

シャーザベスラ「バレるならバレるで、城に入る時とか権力使うからいいさ。身分証もある」

芽里「守秘義務なので言えません」

○船・個室

芽里「さて、今回は前回と違って着くまでに時間がかかりますね。改めて目的を確認しましょう。ポストゼランガロニア法国に、世界滅亡を目論んでいる魔族がいる可能性

があります。なので、直接会って、場合によつては直接叩きます」

シャーニューニダ「直接叩くんだな、王を殺すなんて国際問題にならないか？」

芽里「世界滅亡に比べたら、王家追放程度痛くも痒くありません」

芽里、真剣な表情で覚悟を語っている。

ルチェリールタ「今までの話を総合すると、500年前くらいにそいつがなんかヤバイものを作ったってことになるよね。それが、ニュンリンが見たっていう巨人かな」

ニュンリン「うん。それで、あの時のフードをかぶっている男がその魔族で……ごめん、顔はよく見えなかったなあ。えと……作られたヤバイ奴の名前なんだっけ」

芽里「ローレ・レドニクスです。わからないことがあれば、ポストゼランガロニアの情報屋に聞くのもいいかもしれませんね」

ニュンリン「そうそう、ローレ・レドニクス」
ルチェリールタ「情報屋か……って、昔は人

魔共栄論がなかった時代だから、そいつが
今も王の座に居座り続けてたら、さすがに
魔族ってバレて追放されてるんじゃない？ 芽
里さんはどう思います？」

芽里「いいご指摘です。ですが、強力な魔族
なら力による脅しでも使って居座り続ける
かもしれません。王の座に就任していなく
とも、裏で操っているかも」

ルチェリールタ「あー……」

ニユンリン「人魔共栄論ってなに？」

ニユンリン、ルチェリールタにくつつ
く。

ルチェリールタ「イエヌダスラが言ったやつ。
人類と魔族は仲良くしましうってもので
……それが後世に伝わって、今の人魔共栄
の世の中がある。ニユンリンそれ聞いたん
でしょ」

ニユンリン「あ。あれか！ あーしが聞いた
意外にもちゃんと伝わってたんだ、よかった……あーし、ずっと人間からエネルギー

集めることしか考えてなくて知らなかった
よ……」

シャーザベスラ「ま、いずれにせよ僕も覚悟
はできてる。芽里、いざとなった時はやる
ぞ。もっとも、人違いだけはやっちゃダメ
だけどね」

シャーザベスラ、腕を組む。

ニユンリン「ねねルチェリールタ、これかわ
いい？」

ニユンリン、ルチェリールタに着てい
る服を見せる。服屋で買ったものだ。
ルチェリールタ「うん、かわいいけどちよつ
と肌出すぎじゃないかな……すっごい目の
やり場に困るんだけど……」

ニユンリン「えー」

ルチェリールタ、視線を逸らす。顔を
赤くしている。

シャーニユーニダ「ルチェリールタ。お前、
魅了最初からかかってないんだよな？」
ルチェリールタ「え？ う、うん。でも、こ

れは誰だって恥ずかしいってば！ あ、でもニュンリンの服が悪いってわけじゃないからね！？」

ニュンリン「えへへ」

ニュンリン、笑顔が続いている。

ニュンリン「ルチェリールタ、ちよつと来て」

ルチェリールタ「え？ えつと……いいけど」

2人、部屋を出る。

チビィ「どこ行くんだよ」

チビィ、ついでにこうとするが、

芽里「お2人のプライベートですので、そっ

としておいてあげてください」

と、芽里がそれを静止する。

シャーザベスラ「なるほどな、だからカイン

との結婚を拒んだわけか。あくまで理由の

半分だろうけど」

チビィ「え？ なんだなんだ？」

シャーニューニダ「やれやれ……あいつら、

情事に現を抜かす気か」

心愛「騎士団長も隅におけぬというわけかの

う？」

○プリマダンケ城下町

T「ポストゼランガロニア法国」

ハイテクな建物や機械が街に点在している。

芽里「この国は法律を重んじます。普通にしていれば逮捕はされないでしょうが、くれぐれも気を付けてください」

ルチェリールタ「はい」

シャーニユーニダ「わかった」

チビイ「でも他国の法律なんて知らないぞ。

大丈夫かな？」

チビイ、不安そうに震えている。

○プリマダンケ城前

芽里「ここがプリマダンケ城です」

チビイ「あいつのいる騎士団の名前か……あれ、あいつの家って確かタ杜王国になかったっけ？」

芽里「そういう人もいますよ」

一行、正門の前に立つ。

門番 A 「何者だ」

芽里「こういう者です」

芽里とシャーザベスラ、身分証を見せる。

門番 A 「わかりました。ですが他の人たちは？」

芽里「客人です。で、お願いがあるのですが、王様に会わせていただけないでしょうか？」

門番 A 「王女様ですか……しばらくお待ちください。おい、王様にこのことを伝えてください」

門番 B 「わかった」

門番 B、城内に向かって走り出す。

しばらくして。

ジャンキサス（40）「お前たちが、俺に会いたいって言う客人か」

アルノ・ヨナ「2人とも、久しぶりなのヨナ」

芽里「久しぶり、ヨナ」

シャーザベスラ「ヨナ！ 無事だったかい？」

ヨナ「あたしは無事なのヨナ」

ヨナ、シャーザベスラに手を振る。

門番 A「この 3 人は、こちらへ御足労願おう」

門番に指さしされるルチェリールタ、

ニュンリン、シャーニューニダ。

チビイ「おい、なんなんだよ？ なんで連れ去られるんだ？」

心愛「よくわからぬが、ここは待っておくのじゃ。ここはポストゼランガロニア。下手に事を荒立てない方がよい」

心愛、チビイを抱きかかえる。

チビイ「ルチェリールタ……」

○地下牢・通路

地下。広い空間にいくつもの牢獄が並んでいる。

門番 A に案内され、3 人は歩いている。

ニュンリン M「え、なにになに？ さっそくなんかやらかした！？」

ニユンリン、ビクビクしている。

兵士たちが、ぞろぞろとやってくる。

その中にリーダー格の男、兵士長が1人。

3人に向かって、何十人もの兵士たちが槍を突きつける。

兵士長「お前たちを、逮捕する。俺たちは精

鋭だ、逃げようなんて考えるなよ」

ルチェリールタ「……ええっ!？」